

西堀川小路の洪水層と御土居

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真手前が西堀川小路西側溝、右手が西堀川、奥の断面の礫層が洪水堆積。(南西から)

はじめに 京都地方気象台は、かつて京都府測候所と呼ばれ、京都御苑内にありましたが、大正2年(1913)に現在の中京区西ノ京笠殿町に移転されました。当時の木造の建物は、昭和43年に鉄筋コンクリートに建て替えられました。今回、この敷地の中央に新たに国の合同庁舎が建てられることとなり、2012年5月から9月まで発掘調査を行ないました。

この場所は、平安時代には平安京右京二条二坊十一町にあたり、敷地の東を西堀川小路が南北に貫いていました。また、桃山時代には、天下統一を成した豊臣秀吉が京都の改造に取り組み、その一環とし

て周囲を堀と土塁で囲って大きな城郭とします。これが「御土居」と呼ばれ、明治ごろまでは市内の各所に残されていました。御土居の西側の一辺が当地の上を南北に通されていました。敷地の西側の南北道路を西土居通と呼ぶのはその名残りです。実際に500mほど南の市五郎大明神いちごろうだいみょうじんには現在も土塁の一部が残っていて、国の史跡に指定されています。

平安時代 調査区の東半で西堀川小路が見つかりました。西半の十一町の敷地部分は、後に行なわれた御土居堀の掘削によって全面的に壊されていました。西堀川小路は、道路の中央に「西堀川」と

いう人工の川を通し、その両側に路面を敷く、京内でも特殊な道路です。京内を南北に貫く西堀川は紙屋川から水を引き込んで、運河として維持・管理されていました(図3-①)。

この西堀川(紙屋川)は暴れ川として古くから知られ、大雨のた



図1 平安京と調査位置

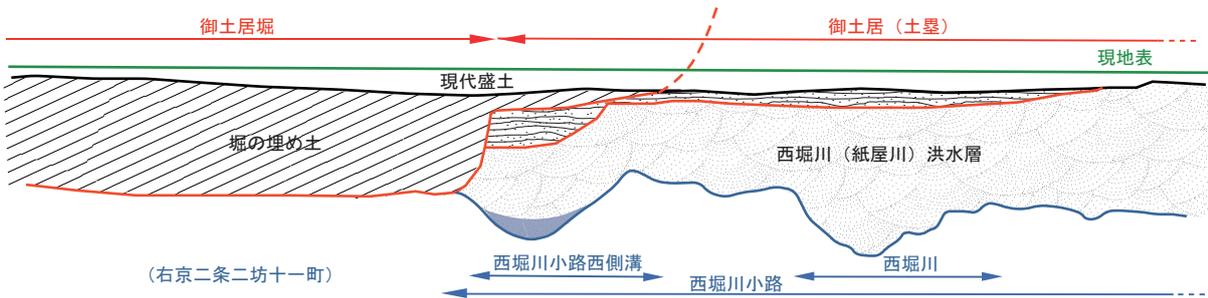


図2 調査区の北壁写真と断面図

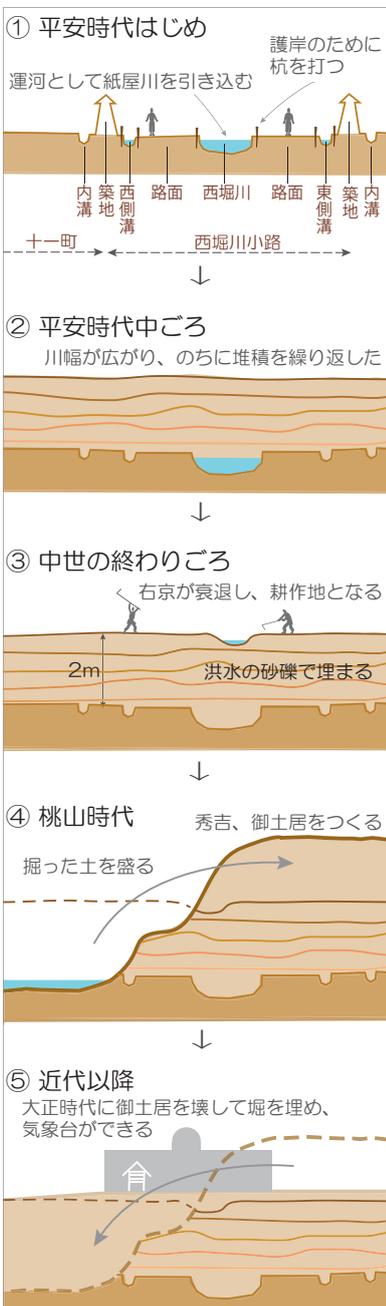


図3 西堀川小路の変遷

びに洪水を引き起こし、大量の土砂を上流から運んで堆積させました。何度かは川の両岸に杭が打たれて岸の崩壊を止める努力がされたようですが、平安時代中ごろ以降は制御ができなくなって、中世までには約2mにも及ぶ厚さの土砂が溜まって西堀川小路周辺は完全に埋没してしまいました(図3-②)。中世の終わりごろには洪水の頻度が減って、比較的安定した時期には畑などとして利用されたこともあったようです(図3-③)。

桃山時代 豊臣秀吉が、天正19年(1591)京都の軍事的防御と洪水対策のために大きく京を取り囲む御土居を築きます。御土居は、北は上賀茂・鷹峯、西は紙屋川から東寺、東は鴨川西岸、南は九条通まで、南北8.5km、東西3.4km、総延長は22.5kmに及んでいたといわれます。

敷地の西半では、深く掘り込まれた御土居堀が見つかりました(図3-④)。深さは約2m、幅は14m以上で、堀の西端は敷地の外に伸びる大規模なものです。この東には本来土塁が高く盛られていた

はずですが、近代に堀を埋めるために平らに削られてしまっていて、わずかに残る土塁基底の一部を確認したにとどまりました(図3-⑤)。

おわりに 平安時代、西堀川小路は左京につくられた堀川小路とともに道路の中央に運河「堀川」を通した特殊な道路として作られました。この紙屋川は、大雨のたびに洪水を繰り返して大量の土砂を運び込む暴れ川でした。当地の周辺をみると、西の西大路太子道一带に現在も異常な高まりがあることに気がきます。これも同じく紙屋川の洪水堆積によるものと考えられ、その影響は広範に広がっていたようです。

平安京の右京は、平安時代中期以降に急激に衰退することがわかっています。今回の調査でわかった洪水堆積の厚さと広がりを見ると、紙屋川の洪水が右京の衰退を早めた原因の一つだといえるかも知れません。そして、桃山時代の洪水対策の一環として造られた御土居が、前代の洪水堆積の上に築かれたことは面白い歴史的現象といえるでしょう。(高橋 潔)